郷土室だより

第125号
平成18年6月15日
編集・発行
中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地1-1-1
電 話 3543－9025
刊行物登録番号 18-031

「変りゆく都市像」(4)

◇「いちば」の〈統制〉

先号（一二四号＝平成十八年二月発行）では、〈市場の大変貌〉と題して、江戸以来続いてきた東京の生鮮食品市場（全部民営だった）が、一片の法令「中央市場法」（大正十二年四月一日施行）によって、市場取引の場所は公設の、つまり東京の場合は東京市設の施設に「収容」されたことを中心に述べ、その施設内での取引方法もそれまでの主流は〈相対（あいたい）取引〉だったのが全部否定されて、発足当時の監督官庁の表現によれば〈相対取引〉は、「封建の遺風」であり「内容不明瞭」であり「極悪」とさえ呼ばれて、全面的に「公開・明朗な競（せ）り取引」に移行されたことを紹介した。

この変化は江戸以来の魚・青果市場業者にとっては、天地がひっくり返るような転換だったのだが、それなりの理由があったのは当然のことだった。もちろんそのことへの言及も先号で述べているのだが、「市場法」施行以来、現在では「卸売市場法」と改称されたのを含めて、この法体系のもとで、本来は自由であるべき市場（いちば）が公設施設に「収容」されてから今年（平成十八年五

「一遍上人絵伝」（福岡市の部分）『日本絵巻大成　別巻』（中央公論社刊）より

月）までの八十二年間に、「市場法」における主なる取引方法が、何時の間にか大正十二（一九二三）年発足当時には「極悪」だとされた取引方法に戻っていたことにびっくりしたことから、予定を変更して、いわばトピックス的な記述を挿入したのである。

◇「いちば」の立地条件

古典的な経済学の用語としての市場とは「証券市場」に限られている感がある。だがここでは、より広範囲な視角で都市の原形としての「いちば」を見ていくことにする。

一二三号の末尾の項で「一神教と多神教（汎神論）」についてほんの少し言及した意味は、土地の状況の特徴や、民族とその宗教の違いによる多彩な生活空間の境には、「いちば」はそれに応じた多彩さを持ちながら成立していたことを言いたかったからである。

いや、むしろ「一神教と多神教」といった対立的な、異質の文化と価値観が触れ合うような場所にこそ、平和的な自然発生的な〈民営〉の「いちば」が必要だったともいえる。

日本の場合は記紀に記録された早い時期、つまりアマテラスやスサノオとほぼ同時に「市場」の神としてイチキシマヒメ（女神）が登場する。漢字では市杵島姫命・市寸島比賣命とも書かれ、またの名を狭依毘賣命（船の寄る所にまします女神）ともされる。またそのこととも絡んで厳島神社の例のようにイチキシマではなくて、「いちば」をイツク＝斎く＝「まつる」という意味をもつものだとする民俗もある。

これらの神名は近世になると大市姫命や稲荷神と混同した場合もあり、仏教の影響を受けて弁才天に転化した場合もある。

その「イチ」が最初に歌われた例としては「大和のこの高市に小高る市の高処……」と雄略天皇の大后が歌ったとされる高市（奈良県）がある（「古代歌謡集」＝古典文学体系本）。国文学の解釈ではこの高市は見晴らしのよい高台に開かれた市を意味する言葉だとされる。そこは物品交換・歌垣・会議・神宴が開かれる神聖な場所であったという。

「いちば」は、このように船が付けやすい場所（みなと）や、大木などの目印のある高台などが多目的な場所として選ばれたのは七世紀の大和だけではなく、むしろ洋の東西を問わず世界的なものであった。

これを逆な見方でいえば異質文化・異民族接触の場所とは、戦争・殺戮・略奪・暴行の場に外ならず、「いちば」が成立する〈平和的〉な場合と場所とその条件はむしろ限られたものだったともいえる。

それだけにいったん成立した「いちば」はその周囲、時には何百キロの範囲までに及ぶ人々から支持されもした。いったん「いちば」の便利さと貴重さを知れば、その存在は忘れることの出来ないものになる。しかし、その場所が特定な勢力の権力的・暴力的支配を受けるようになると、たちまち雲散霧消つまり跡形もなくなってしまうのである。

◇伝道キャラバン

歌舞伎十八番のトップとされる「勧進帳」の原形は、治承四（一一八〇）年にはじまった〈源平合戦〉が一区切り付いた時点で、平重衡が奈良の大仏殿を焼いたのを再建するための費用を募るために、諸国を募金（勧進）して廻る「山伏姿」の人々のグループの身分証明書として発行されたものである（この時期には個人的旅行といった単独行動は事実上不可能だったためである）。

余計なことだが「勧進帳」について付け加えると、安宅関における弁慶がその身分証明書である勧進帳を、関守である富樫の要求で読み上げる場面が、この劇の一つの山なのだが実はその勧進帳と称する巻物には何も書いていなかったのを、弁慶がいわゆる〈弁慶読み〉または〈弁慶のそら読み〉をして嫌疑を逃れた緊迫感のある場面である。

なお観客は十分そのことを承知していて、役者がどのように緊迫感を盛り上げるかを、見所にしていたのである。

さきに縄文・弥生時代から「い

ちば」の存在が推定されていることに触れたが、十二世紀末になると、有力社寺の山伏姿のある程度の自衛力を持ったグループが伝道や勧進（寄附募集）を目的に、各地方の豪族（主として武家）の間に勧進行脚（伝道キャラバン）が出来るようになっていて、そこに曲がりなりにも不完全ながら武家政権の〈統一〉の状況が見られる。

関東地方、特に東京の武蔵野台地の場合は武家の熊野信仰が盛んで、豊島氏・葛西氏・江戸氏・蒲田氏・六郷氏などがその檀那になっていることを証明する文書が数多く残されている。

具体的な例を挙げると、東京二十三区で発行されている各区の「区史」では、その中世の記述の中で例外なく、各区の古地名にちなむ中世豪族の殆どが熊野信仰を支持した事を「熊野　那智文書」などで実証的に解明している。

しかし、ここで取上げたいことはそうした熊野信仰の伝播のあり方もさる事ながら、その伝道行者である御師と中世豪族が師檀（契約）関係を結び、御師が廻ってきた時は宿泊させて他の地方の情報を得る手段にしていたことに注目したい。

現在のような情報の流通手段が全く無かった時代には、他地方というより自分の領地に隣接した同じ武蔵野台地上の地域の情報でさえ、乏しかったために、御師（祈祷をはじめ〈熊野の午王〉の配布が本来の姿）がもたらしてくれる宗教活動以外の事柄は、限り無く貴重だったためである。

注〈熊野の午王〉

熊野三山からの護符。七十五羽の鳥を配したお札で「守札」・「起請文の用紙」として重要視された。この護符に書かれたことに違反すると神罰たちどころに下ると信じられていた、霊験あらたかなお札。

それもあって伝道者に対しては客人として丁重に扱い、その行く手の先々まで自家の印象を「良いもの」として伝えてもらうことも地方豪族としては重要なことであった。これは御師に限らず僧侶や職人に対する場合も同じで、〈一所不住〉が建前の人々の消息が、ある場所から途絶えてしまうということは、地元側としてはその地点で事故があったと周囲から思われないようにしなければならず、また巡行者もその点で鋭敏だったのである。

間違っても巡行者に危害を与えれば、俗に言われたように「坊主殺せば」七代祟ったのである。

それは怨霊や幽霊といった形ではなく、世間の情報がその地域だけに途絶してしまうために、七代どころかその代で滅びてしまう結果にもなった。世は源氏から北条政権になった時代のことである。

◇東アジアの変化

こうした動きに重なって十三世紀に入ると、中国では大きな変化が起きた。蒙古の建国（一二〇六年、元と改称したのは約七〇年後の一二七一年）である。「中華」を誇る漢民族の帝国は遊牧・騎馬民族である元に駆逐されて南宋は長江南岸に移り、それとともに中国仏教も大幅に中国南部を経て日本に移動してきた。多数の禅宗（曹洞宗・臨済宗）の高僧が、仏典を始め多くの文物をたずさえて日本に渡来し、北条政権の手厚い保護のもとに、京都と鎌倉における臨済宗の寺院の五山制度の成立や、大寺の建立が盛んに行なわれた。

南宋からの渡来僧は漢民族の仏教を日本列島への緊急避難させることが当面の目的であり、北条政権側としては渡来僧の尊重は、中国の政情の変化に対応するための情報収集の意味合いが強かった。また朝鮮半島の王朝も南宋と同じ危機感を持っていたことも大きかった。

ここで渡来高僧列伝を具体的に紹介するまでも無く、二度の元寇（蒙古襲来）と渡来僧の記録を突き合せてみると、鎌倉幕府の大陸側の事情についての情報収集努力が積極的だったことがはっきりと見て取れる。

また日本の民間側でも例えば日蓮が『立正安国論』を書いて、幕府当局に提出したことはよく知られているが、それは民間の貿易業者や彼が自称した通りの〈安房の漁師の子〉だったとすれば、漁民や海上交通のプロから対岸である大陸の事情についての情報が得られやすい立場にあり、蒙古襲来という「国難」の予想は荒唐無稽な

ガセネタではなくて、かなり信頼が置ける情報であったことがわかる。それゆえに幕府も彼の言動や主張を一方的に否定できなかったのである。

◇情報の「いちば」

結局、文永十一（一二七四）年・弘安四（一二八一）年の二回、場所も同じ現在の北九州市域を中心に、元から出動命令を受けた江南軍と高麗軍の襲撃を受けたが、二度目には〈神風〉に助けられて国土への大規模な侵略は実現しなかった。一度目の襲撃に懲りて幕府は、その同じ海岸に大掛かりな防塁を築かせたが、この決定はどのような理由による決定だったのであろうか。

約七三〇年前にどのような理由・根拠によって前回襲撃を受けた場所に、主に九州地方の武士たちを動員して、巨額の費用をかけて石塁を造らせたのかは、単に古戦場を公園化したわけではなく二度目も同じ場所に来るという確信が無ければ、不可能だったと言ってよいだろう。

このような〈敵の手を読む〉事が出来たのは、やはり民間レベルの海上交通専門業者の知見を情報として纏める力が当局にあったことを推察させる。それが渡来高僧を優待した一つの結果でもあり、なおその底辺には多数の船乗りや漁民の経験を掬い上げる機能が働いていたのである。

この機能こそ、繰りかえし主張するように「都市」の機能そのものだった。この場合の「都市」とは、渡来僧達に与えられた巨大な寺院組織であり、列島の「対岸」と往復を重ねていた〈航行する漁民・商人〉であり、それらの階層の人々に精神的安定を与える宗教者達の、いわばハコモノとしての仕掛けである大寺院建築ではなくて、人々の意識と行動といったソフトな思考の「場」が形成されて、「都市」そのものの役割を果たしたものだった。

この「都市化」は日蓮より僅かに遅れて活動を始めた時宗の創始者一遍智真の場合にも、より具体的に見られる。ともに難解な仏典や読経をしなくても「題目」と「名号（踊念仏）」を唱えたり踊ったりするだけで往生できるという教義は民衆、とくに〈一所不住〉だった商人・職人層の熱烈な支持を受けた。

既成の他宗に対して排他的だと思われている日蓮の言葉として、同時期の時宗に対しては「法華と名号は一体なり、法華は色法、名号は心法なり」という言葉も残され、一遍の場合には聖権と俗権の分離を主張し、俗（この場合は武家の支配）とは妥協しないことを主張している。これが「市の聖」の本性だった。

一遍の宗教活動の始めは二度目の元寇による戦傷病者の救済のために温泉地の別府金輪に領主の大友頼泰に依頼されて医療施設としての松寿寺を造ったことだとも言われる。その活動の一端を描いた『一遍上人絵傳』（京都・歓喜光寺の十二巻本）が有名だが、ここではその『絵伝』の中から都市（いちば）としての施設だけを紹介すると、「福岡市」（表紙の写真はその一部）の場面の左に小溝、下に船着場が、信州佐久郡の「伴野市」の「いちば」風景も同じ視角の描写が見られる（『日本絵巻大成別巻』中央公論社・昭和五十三年刊（同書九九ページ辺））。

この絵巻には最も主要な都市施設としての下水・小溝・舟はし・曳舟と曳き子などが、遊行先の各地の風景としてモレなく描かれている。

「最も主要な都市施設としての下水・小溝」と特記した理由は、古代の奈良の高市の場所のような地形と高い目印の木といった、いわば自然的条件が「いち」の場所だった時代から、定期的に「いち」が開かれるようになってくると、その場所で一番最初に整備しなければならないことは、〈使った水〉＝下水の処理をどうするかという事であった。

それゆえに『一遍上人絵傳』には「いち」の場には、下水に相当する小溝が殆どといって良いほど描かれているのが特徴的なのである。